

伊藤千代子研究の突破点

— 研究ノートから —

(2025.8.10—生誕120年・「獄中最後の手紙」公開20周年—
苫小牧記念集会講演・文書報告)

藤田 廣登



伊藤千代子(1905-29)



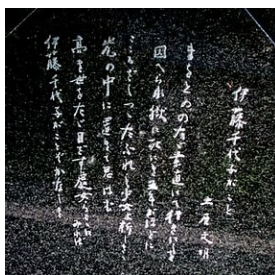
研究の成果を反映した著者本(学習の友社刊・1600円)



個人観賞用・デラックス字幕版 DVD (4500円)

はじめに—伊藤千代子なこと

—土屋文明 教え子を権力に奪われた怒りを詠む



諏訪高女時代の土屋文明・文明詠歌直筆 諏訪高女時代の伊藤千代子

伊藤千代子は、市ヶ谷刑務所収監中に発症した病気治療のために収容された精神科病院・東

京府立松澤病院で誰にも看取られることなく24歳2か月の生涯を終えた。1929(昭和 4)年9月24日未明であった。

それから6年が経過した1935年秋(昭和 10 年9月。以下、^ニは藤田注を示す)、アララギ歌人、土屋文明は、東京女子大での講演を終えた後の茶話会で、聞き入る生徒たちを前にして「皆さんの先輩に伊藤千代子という女性がいましたが知っていますか」と問いかけた。伊藤千代子は、かつて諏訪高等女学校時代に将来を嘱望していたひとりである。文明は、眼を輝かせて聞き入る女性徒たちを前にして高ぶる気持ちを抑えることができなかった。

文明は、同時に治安維持法弾圧によって非業の死をとげた教え子を権力の魔手から救いだせなかった悔恨と憤りをえることができず、その日の夜か翌日に一気に詠いあげたと思われる。

そしてその詠 6 首を「某日某学園にて」と題して短歌誌『アララギ』1935年 11 月号に掲載した。

某日某学園にて

語らへば眼かがやく処女等に思いつ 諏訪女学校にありし頃のこと
清き世をこひねがひつつひたすらなる 処女等の中に今日はもの言ふ
芝生あり林あり白き校舎あり 清き世ねがふ少女あれこそ
まをどめのただ素直にて行きにしを 囚へられ獄に死にき五年がほどに
こころざし一つたふれし少女よ 新しき光の中におきておもはむ
高き世をただめがす少女等ここに見れば 伊藤千代子がことぞかなしき

(^ニ 少女=おとめ、五年=いつとせ)

文明が「某日某学園にて」という一見どうでもよいようなタイトルを付けたのには、直接的には後半 3 首の真意をオブラート化するためではなかったかと私には思われる。前半 3 首には、眼を輝かせて聞き入る学生たちを見ながら、次第に気持ちを高ぶらせていく文明のありのままを詠っている。

後半 3 首は、前 3 首と明確に区別できる歌となっていることが判る。もちろんこの 6 首は分ちがたくあるが、文明の意図・命題は後半 3 首にあることは明らかである。つまり、治安維持法弾圧で獄死をした伊藤千代子が主題あった。詠歌から読み取れるのは、将来を嘱望していた教え子を権力に奪われた悔しさ、怒りさえにじませている。同時に千代子のこころざしたもの—社会変革のこころざしに「新しい光をあてよう」と自分にも、社会にも呼びかけているのである。この意図をカモフラージュするために前 3 首があったのではないか。

土屋文明が、この歌を詠んだ 1935(昭和 10)年は特高警察が目や目を光らせ、ますます凶暴な弾圧を繰り返していく時期、戦争に異議を唱えるすべてのものをなぎ倒していく暴圧—「法の暴力」が荒れ狂っているさなかである。この歌の公表には勇気のいることであった。文明が頭(こうべ)をたれるのではなく、公然と面(おもて)をあげて詠み切った勇気を称えたい。

文明のこの歌の真意は、やがて老境に入った 93 歳、千代子の最も優れた後継者となった塩沢富美子氏(^ニ野呂榮太郎と結婚)が揮毫を求めた時、文明は即座に「伊藤千代子がこと」と主題を墨書(写真)したことで明らかになった。文明が長い間、胸に秘めてきた「主題」が吐露されたのである。

コラム

映画「わが青春…」は、今年3月末で650会場、10万人を超える人々がつどう一大イベントとなり、今世紀の独立プロ作品では際立った成績を創り出しました。どの会場でも必ず拍手が湧きます。その反映は感想文の提出率の二～七〇%という高さにも表れています。その内容は、主人公・伊藤千代子への哀惜を通り越して、100年前「私は権力には負けない」という闘いと抵抗へのメッセージを真正面から受け止め、自らの人生行路への内省をこめたのとなっています。ここにこの映画が描き出した24年の短い生涯が感動と共感をよび起す源泉となっていることがわかります。

	<p>土屋文明が東京女子大で伊藤千代子について発言してから87年を経過した2022年10月14日、東京女子大講堂での「わが青春…」の上映会が開かれた。上映会に参加した森本あんり学長は、参加した学生、教職員他を前に</p> <p>「このような学生を生んだ本学を誇りに思う」</p> <p>と発言。参加者130人の拍手は長く鳴りやまず、6月に当選したばかりの岸本聡子杉並区長がかけよってかたい握手を交わす場面も生まれました。</p> <p>それから30分、多くの参加者が門限まで会場に残り、高揚した雰囲気でも話の輪が広がりました。</p>
<p>▲東京女子大での上映会のフライヤー</p>	

一 別の人の生きたように」

伊藤千代子さんの母校である諏訪二葉高校の学生です。この映画がきっかけで千代子さんについて興味を持ち、たくさんのお話を聞くようになりました。千代子さんの生きざまはとても深く、心に残りました。この映画で、まっすぐに凛とした千代子さんの姿を見て、自分自身の生き方についても深く考えさせられました。

僕は、この千代子さんのことを、”他者のことを自分自身のように考えられる強くとともに優しい人”だと思います。自分の思ったこと、感じたことが国家と違っても、自分の考えを曲げない。その強さは全て、貧しく、大変な思いをしている人への共感と、自分が何とかするのだ、という決意から来るのだと思います。

僕は千代子さんの強さ、優しさを見習い、心の糧としたいです。僕も千代子さんのように生きたい、と強く思います。強く、優しく、人を想い、生きたいといます。本当にありがとうございました。

◆中学生の感想文◆

伊藤千代子さんの力強く何事にも屈せず、明るく生きた姿がとても強く心に残っています。これが実際に起きていたとはとても衝撃ですが、勇気をたくさんもらいました。

(ともに「すわか文化村」アンコール上映会フライヤーから転載)

伊藤千代子の生涯の調査・研究、顕彰は、戦前の女性活動家の人々の中で極めて遅れて出発した。その要因として、彼女の「死因問題」に絡み、正しい評価にたどり着くのに時間がかかったことである。その千代子を漆黒の闇から救い出した人々にまず焦点を当てよう。

アララギ人が切り拓いた地平

戦前、伊藤千代子は、一部の人に「狂い死んだ女」という汚名を着せられて抹殺されたままであった。戦後、この歌に詠まれた伊藤千代子とはどういう女性かという問いかけから研究を始めたのはアララギ人であった。

私たちは、戦後、短歌結社「アララギ」に拠る人々が、民主的人士たちより早い時期から伊藤千代子の事蹟に着目して研究を進めてきた先駆性を尊敬の念をもって語る必要があろう。そのなかでも、吉田漱(すすぐ、歌誌『未来』主宰)、東栄蔵(ひがし・えいぞう、長野県の国文学者、教育者)の二人の先駆的研究をあえて挙げておこう。

吉田氏は、戦後早い時期から伊藤千代子の郷里諏訪での文明の足跡、千代子周辺の関係者とも会い詳細な資料を蓄積され、『増補改訂 土屋文明私記』(六法出版社刊、1996年)として完成された。

東氏は、伊藤千代子研究者の中で「浅野晃に直接会って聞き書きと、資料―「伊藤千代子追悼録」の一部、獄中最後の手紙4通、浅野晃手記など―を入手した」唯一の人である(『伊藤千代子の死』未来社刊、1979年など著書多数)。

私藤田は、1980年代に入って、東氏から直接資料の一部コピーの提供を受けご教示を頂いた。またそれが縁で千代子の「獄中最後の手紙」4通の探索の一翼を担うこととなった。

私たちの伊藤千代子研究は、こうした人々の営為によって得られた知見がもたらした研究の到達点を受け継いで1980年代から本格的に始められた。

民主的人士による千代子研究のながれ

① ルポ作家・山岸一章氏

民主的人士のなかで、もっとも早く伊藤千代子研究に着目したのはプロレタリア・ルポ作家の山岸一章氏であると思われる。

1970年3月15日の「赤旗」は、8面全面にわたる山岸一章氏の掌編ルポ「信濃路」を掲載した。

山岸氏は、前年の秋に塩尻駅前の「あさひ館」(共産党市長・高砂政郎氏経営)に泊まって戦前の長野県内の共産党員の調査を重ねていた。ついで、敗戦の9か月前に府中刑務所で獄死した辰野町出身の有賀勝・芳枝夫妻の調査をおこない、諏訪入りした。諏訪では、懲役15年の重刑をうけ重篤となり江古田療養所で病死した村上多喜雄(23歳で共産党東京市委員長)の調査をつづけた。その時、面談したKさんは伊藤千代子も知っていて、

「3・15事件の前だったけど、伊藤千代子は勝ち気な威勢のいい娘で、ときどき東京

から連絡にきてハッパをかけて行った。いつまでにどの紡績工場に何人の組合員を組織しろと言って、目標までにできないと、まるで叱りつけるように責めるんだ」…

「Kさんの記憶に残っている伊藤千代子の印象は良くないようだった。私は、あまりにも傷ましい生涯を終えた、その人を弁護して話さないでいられなかった…」

山岸氏は、赤旗分局のS君の案内の申し出にも逡巡する。

「私はためらった。伊藤千代子の記録は雑誌(『月刊学習』)の連載に書く予定はなかった。活動した期間が短く、その最期が傷まし過ぎたためだ』と。続けて、

「しかし、その人を悼む私の気持ちは強かった。その人の生涯をできる限り調べたいと思っていた。それで取材ノートにメモだけは書いてきたのだった。党を裏切り、妻を狂死させたA(浅野晃)は、いまは大学教授だった。」

こうして、山岸氏はSさんのバイクの荷台に乗せてもらって、千代子の従兄弟の伊藤初祢さんと会い話を伺い、初祢さんの案内で墓参をしたのである。

山岸氏は、伊藤千代子についての調査メモについて用意してきていたが、千代子の傷ましい最期のことが頭にあり、諏訪の民主人士の間で千代子の評価が定まっていなかったこともあって、結局は千代子についてそれ以上追求することはしなかった。私は、氏のメモの内容からして、夫浅野の裏切りの結果、獄中で精神的錯乱を発症したことから、当時あった「狂死説」から抜け出せないでいたように思われる(死因の項目で再論する)。書きたいのだが、書けない苦衷を合わせ持っていた。

後年、労働者教育協会・学習の友社時代に執筆をお願いする機会が何度もあり、接触しての私の感触である。

② 塩沢富美子と千代子

東京女子大社研で伊藤千代子のリードで思想的に成長した塩沢富美子さんは同志であった伊藤千代子のリーダーシップを高く評価していた。彼女の学生社研運動と獄中生活の中の伊藤千代子についての記述などは、後に、民主的人士の中での伊藤千代子の評価を正しく進めるのに役立った。

『野呂榮太郎とともに』(未来社、1986年刊)のなかで、「上級生伊藤千代子—社会諸科学研究会」、「市ヶ谷刑務所で」などの見出しをたてて伊藤千代子と共にたたった日々を尊敬をもって書いている。乏しい情報のなかでも、千代子の病名を「拘禁性ノイローゼの激しい症状」とするなど、多くの同志が「発狂」とするなかでひとときわ高い分析力を示している。

塩沢は、1928年秋共青の名簿漏洩から検挙され、千代子と同じ市ヶ谷刑務所に収監され、千代子の指導を受けながら獄中闘争を展開していく。入獄時に着物の襟に鉛筆の芯を縫い込んで持ち込みに成功、千代子ら治安維持法弾圧被告の獄内通信に画期をもたらした。

彼女が公判廷に臨み執行猶予で獄外に出られることが判った時、獄内の指導グループから、「中央(委員会)に届ける文書」を託され、思案ののち宅下げの書籍の中に忍ばせて持ち出しに成功、岩田義道に届けるという離れ業を行なったことで知られる。

戦後、千代子の郷里を訪ね、早い時期から千代子の顕彰活動を行った一人である。その塩沢は、詠歌を残している。

「きみによりはじめて学びし「資本論」わが十八の春はけわしく」

「花の下に佇みてわが名呼ぶ伊藤千代子を獄窓よりみしが最後になりぬ」

文明が、塩沢さんに「某日某学園にて」詠歌の主題の真意を「伊藤千代子なこと」と墨書して渡したのもうなづけよう。

塩沢富美子さんはいま、東京・西麻布の長谷寺(ちょうこくじ)の塩沢家墓地に野呂榮太郎のレリーフ・分骨と共に眠る。レリーフには「歴史を変革するとは、未来の歴史を創造することである」という野呂の『日本資本主義発達史講座』趣意書にある言葉が刻まれた。

③ 日本共産党関係者の研究と顕彰

1980年代に入り、日本共産党の女性幹部、広井暢子氏(現、常任幹部会委員)の戦前の女性共産党員の不屈の活動に光をあてる作業が系統的にすすめられた。そのことが、昭和の初期、天皇絶対の専制支配の暗黒時代に入党歴の浅い女性党員が命がけで社会変革の事業に献身する姿をうかびあがらせ、伊藤千代子にも光が当てられ、その業績がしだいに知られるようになった。

1992年3月5日の日本共産党の第5回中央委員会総会において宮本顕治議長(当時)の冒頭発言はこうした研究の到達点を精確に反映したものとなった。

宮本氏は 治安維持法の弾圧下のきびしい条件の下で活動して斃れた田中サガヨ、飯島喜美、高島満兎、伊藤千代子の4人の女性活動家の氏名をあげて顕彰した。伊藤千代子については初めて知る人も多かったのである。

その年の秋の第32回「赤旗まつり」での「不屈の青春―戦前の女性党員の群像」記念館展示では、冒頭に伊藤千代子を取り上げられて、会場を訪れた多くの人々に強烈な印象を残した。

ついで、1994年発行の『日本共産党の70年』での次のような記述へとつながった。

「まだ、党の若い時期に、自分自身も24,5歳という若さで、身をていして共産主義運動のなかで働いたことは日本共産党の誇りである。伊藤千代子は、3・15事件で検挙され、拷問を受けたが屈せずにとたかい抜いた。」

伊藤千代子だけは、この時初めて名前を知った人が圧倒的であった。なぜ、無名の千代子が、戦後45年も経ってから顕彰の対象として浮かび上がって来たのか。それは、彼女の最期が非情であり、その死によって一部人士・組織の中で彼女の生涯が正しく評価されることを遅らせてしまった側面を否定できない。

④ 長野県下の顕彰・研究の進展―多喜二、山宣に続く顕彰運動へ発展

日本共産党中央委員会での伊藤千代子顕彰は、郷里長野県での千代子顕彰運動にひきつがれ、県内在野での千代子研究の長足な進展を促すものとなった。

藤森明氏の研究と執筆活動

千代子の郷里諏訪では、茅野(ちの)市の郷土史家、藤森明氏(元日本共産党茅野市議会議員)の研究と地元紙への寄稿が始められた。

① 1992年には、地域新聞「新すわ」(共産党諏訪市委員会)、「茅野民報」(同茅野市委員会)などに系統的に掲載され、次いで長野県党組織の「民主長野」紙に93年6月から13回にわたって「伊藤千代子の生涯とその時代」と題して連載が行われ、長野県内での千代子への関心度・知名度が一気に高まった。

② この時、「再び戦争と暗黒政治を許すな」という運動スローガンを全国に先駆けて提唱し、また、これまで治安維持法被弾圧者を中心に組織されていた治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟にあって、いち早く犠牲者以外の支援会員を擁して活動を展開した最初の県組織である長野県本部は、藤森明氏の執筆になる「夜明けをめざす不屈の青春－伊藤千代子の生涯とその時代」をパンフにして発行(1994年3月。B6判・44頁)、県内外に3000部を普及した。

このパンフは大きな反響を呼び起こしただけでなく、その内容は、県内の一部にあった千代子の「非情な死」－「狂死説」「縊死説」「薬殺説」を乗り越えて、彼女の生涯に新しい光を照射するものとなった。

③この時期、在京でも伊藤千代子の事蹟を語ってほしいという要望が、千代子に関心を寄せ資料収集を始めていた藤田廣登(旧姓小口、長野県長地村－現下諏訪町出身/当時、労働者教育協会・学習の友社勤務員、現治安維持法賠償同盟顧問)にも寄せられるようになった。こうした経過から、藤森明氏との連携が図られ、藤森氏の前記パンフの内容をベースにした新しい著作物の学習の友社からの発行を依頼した。企画は「戦後50年」「青年向けに」がキーワードとすべくお願いし、執筆活動に入っていた。東京と茅野駅を往復しながら、在京で揃えられる資料の提供もさせていただいた。

④ある時は、東京女子大をめざす千代子の生涯で、彼女がなぜ仙台の尚綱女学校で1年間学んだのかが話題になった。当時は、小学校時代の「恩師」川上茂との恋愛・結婚に敗れて諏訪に居づらくなって仙台に逃げていった、傷心を癒すため、藤村に憧れて、などと憶測されていた。仙台の学習協の友人の鈴木楫吉氏に頼んで調査を開始、『尚綱女学校70年史』を県立図書館から借りだしてもらい上野駅まで運び、待ち受ける私が写真コピーし、鈴木氏がその日のうちに図書館に返却するなどの、今日では考えられない資料探しが始められた。

また、藤森氏の原稿では、労農党から立候補した共産党員・山本縣蔵が北海道1区(札幌、小樽、後志など)へ向けて出立資金に窮したことから、伊藤千代子が卒業直前の学費を夫の浅野の懇請に応じて全額カンパしたことが知られている。藤森氏は、小林多喜二の『東倶知安行』の冒頭にある「一、参拾円也 東京×××子」は伊藤千代子のことであると断定されていた。

そこで、私は、二度にわたって小樽を訪ね、小樽商科大学の荻野富士夫先生の教示を得ながら、小樽労農党事務所に貼り出された当時の檄の写真を捜したり、また、この選挙の時の財政係で「檄」の筆写人あった風間六三氏の書付けなどの探索を試みたが、間違いなく千代子だという確証は得られなかった。藤森氏との話し合いで、断定は避け、募金者は伊藤千代子だと「読めるように思われてならない」という表現に落ち着いた。

もちろん、これが伊藤千代子であれば、多喜二が千代子を認識していたことにもなり、間接的接点という事実はそれなりに話題になるところであった。

この時点で、藤森氏と藤田が用意できた伊藤千代子にかかわる新しい資料は、「伊藤千代子追悼録」(喜入＝浅野綾子編、東栄蔵氏提供)と『女子党员獄中記』(原菊枝著、復刻版・三多摩いしずえ会、森山四郎・良子氏提供)などであった。

藤森明著『こころざし いまに生きて』の上梓が顕彰碑建立の端緒開く



こうして、1995年11月3日、「こころざしいまに生きて-伊藤千代子の生涯と時代」が第34回赤旗まつり会場で発売された。

そして翌年の2月24日の長野県諏訪市内で開かれた出版記念会で、期せずして「伊藤千代子顕彰碑」建立を求める意見が相次ぎ、5月30日「伊藤千代子顕彰碑建立実行委員会(実行委員長・木島日出夫日本共産党衆議院議員)が結成された。賛同呼びかけ人には、笠原俊一諏訪市長(当時)、関勘正真志野区長など幅広い方々のよびかけで全国的募金が始まり、1997年7月21日、龍雲寺霊園の一角、千代子の墓所から40mと至近の諏訪平を一望する場所に三角錐形の伊藤千代子顕彰碑が建立された。その中核に、土屋文明の「伊藤千代子がこと」3首が翻刻された。

文明は、生前、「歌碑ほどばかばかしいものはない」と各地からの歌碑建立の申し出をことごとく断っていた。そのために、文明のご遺族一長女小市草子(かやこ)さん、次女高野梅子さんなどのご遺族の承諾が必要とされた。ご快諾が得られたのは、文明夫人テル子さんが千代子の英語補習などに特別の力を注いでくださったことと共に、三人の娘であるご遺族がすべて東京女子大の千代子の後輩にあたることなどであったことも指摘しておきたい。

藤森氏との約束ごと 伊藤千代子顕彰碑の建立は、日本全国に伊藤千代子の存在を示す画期を創り出した。その営為は、信州の進歩と革新の伝統を受け継ぐものとして注目され、県内はもとより関東を中心に日本全国からの墓参と顕彰碑を訪ねる人々が後を経たない状況が続き今日に至っている。

この建立事業で長野県内の、とりわけ伊藤千代子の郷里諏訪の民主的人士々が果たした役割は大きい。



[伊藤千代子顕彰碑 1997年7月21日、千代子誕生日に建立](#)

顕彰碑の保全管理と案内、節々の記念行事を進捗するために「伊藤千代子こころざしの会」(現会長、藤森守氏・元日本共産党諏訪市議会議員)が結成され、今日まで旺盛な活動を継続している。その規模は、小林多喜二、山本宣治の定期的な顕彰事業に匹敵する規模となっ

ており、顕彰碑の存在がそのシンボルとして大きな役割を担っている。

さて、藤森氏の著書出版を契機に、千代子の生涯で未だ不明確な部分が数多くみられることから、さらに研究を続行することが藤森・藤田双方の関心事となった。とりわけ千代子の死因を特定する決定的資料・文書の探索などと共に、24年という短いがほとぼりするような青春をさらに豊かに彩る生涯への資料等による接近を試みる話が話し合われ、千代子の活動の場所が東京であったことから在京での資料探索作業に藤田が積極的に参画することとなった。

藤森氏の急逝 その途上、1999年4月10日、藤森氏が志なかばで急逝されるという痛恨事が出来た。こうして本来なら藤森氏が進めるべき研究活動は藤田の肩にかかることとなった。出版社の編集マンが、著者の執筆活動に入りこむことはないが、二人の合意は、私が同郷人ということもあって、揺るぎないものであった。

当時、私は東京・新橋にあった「平和と労働会館」（産別会議の遺産で構成）の運営にタッチしていて、1980年代の後半から、労働組合運動の再編*—労働組合運動の右翼的潮流による総評の解体、右翼再編、たたかう労働組合の排除などという緊迫した状況のなかであって、階級的潮流の母体である統一労組懇から「全労連」（全国労働組合総連合）へとさらに大きく発展させるために、平和と労働会館の6階を貸与しての運営に全力を挙げていた。

この事業は、産別会議解散時に182万組合員の総意として「遺産は平和と労働運動に役立てる」という「決議」の最終実践過程として進行された。こうした中で老朽化した会館の建替えではなく、将来を展望して平和と労働会館の2倍のスペースを確保する「平和と労働センター・全労連会館」建設事業が1998年からスタートし、2001年6月には移転完結に直面していた。建設事業の専従者は私のみであった。しかし千代子研究は手放さない、という思いだけはつないでいた。藤森明氏との約束は果たさねばならない、千代子の資料探索の作業は、藤森氏亡き後は私の肩にかかっているという気概だけはあった。

私は、この間の独自調査で解明できたテーマ毎に「伊藤千代子と青春・試論」と題する私家版パンフとして100部ほどを研究者、関係者に配付する作業を続けた。2001年から4年まで、実に14号にまで到達するものとなった。このパンフ発行は、識者の千代子への関心を呼び起こし、新しい情報が次々と寄せられ、それを一つひとつ丹念に掘り起こしていく過程となった。

秋元波留夫先生 20世紀の最後の年となった2000年12月、精神科医・秋元波留夫先生から伊藤千代子の松澤病院時期の「空白」を埋める貴重な資料の「発見」がもたらされた。当初先生は、電話口で、あなたが松沢病院入院者で探している女性は中本たか子さんですか、と聞かれた。先生の意外な問いかけは、松澤病院入院歴4回の中本たか子（のち蔵原惟人夫人）の治療に当たったのが秋元先生であることが、あとで判明して疑問が氷解した。伊藤千代子の氏名を伝え、先生の調査の約束後も半信半疑であった。1週間後に「伊藤千代子の病歴記録が発見できた」という先生のご返事、矢も楯もたまらず世田谷区喜多見のご自宅に駆けつけた。資料を前に94歳の先生の目に涙が光っていた。私は嗚咽を抑えることができなかった。

こうした伊藤千代子の事績を決定づける「資料」が没後70年経って発見されたことは、

丹念な探索をかければ、まだ新しい資料の発掘が可能なことを示していた。こうして伊藤千代子研究は今世紀にも持続していくことになる。そうして今世紀に入り、千代子研究史上最大の成果と言える「獄中最後の手紙」の大発見へとつながっていったのである。

(二) 伊藤千代子の「死因」をめぐって

こうして、市ヶ谷刑務所での劇症発症から錯乱状況へ、ついで松澤病院入院中の37日間の診療・病症記録が明るみに出た。死因は「肺炎」と明記されていた。

急逝した藤森氏が著作のなかで「千代子さ(ん)には『狂死説』、『縊死説』、『薬殺説』が根強くある」と指摘し、そのことが千代子への正しい評価を遅らせてきた、と語っていた。いまその「誤説」から千代子が解き放される時を迎えたのである。21世紀の幕開けは、伊藤千代子の正史をさらに豊かにする燭光であった。

★歪められた死因－「狂死」説

伊藤千代子の死因について、戦前はおろか戦後も「狂死」と表現されることが多くみられる。いったいこの表現のルーツはどこにあったのだろうか。私は、2つの要因を考える。

一つは戦前の極秘・「弾圧犠牲者名簿」にみる記載事項によるものであろう。

治安維持法弾圧下の困難な中で「日本赤色救援会」(1928年4月、山本宣治らの呼びかけで結成された「解放運動犠牲者救援会」が国際組織に加盟して発足した)は1931(昭和6)年に27年の学連事件(治安維持法適用弾圧第1号)～1930年までの被弾圧犠牲者1345人の名簿を作成した。犠牲者の多くが獄中に勾留されているときに、その一人ひとりの名簿(氏名、年齢、所属団体、出身階層、第1審・第2審判決刑期などを明記)を作成することの困難は想像を絶する。この「名簿」は犠牲者救援運動に供されたほかは秘匿、藤沼栄四郎氏(川合義虎らの南葛労働会の理事長。渡辺政之輔ともども亀戸事件虐殺を免れた)の手で保管され、のちに小林杜人氏(長野県更埴市出身、3・15事件で転向、戦前は転向者の更生事業をおこない、戦後、日朝・日中友好運動に尽力した)に託されて戦後を迎えた。

この名簿は、1970年代に入り、日本国民救援会の森山四郎氏の手で発見され200部が復刻された。藤田はその28番を保有している。

この名簿の35頁に「死亡者リスト」があり伊藤千代子が搭載され、「25歳、女大退(中退の意)、死亡原因・狂死」と記載されている(資料 ↓)。

名簿現物コピー入る

このように記載されたのには理由がある。当時、千代子は女子舎房のリーダーとして獄中闘争の渦中にあり、特に、男子舎房での党指導部水野成夫(にしげお、当時、党事務局長)、などの転向と解党主義・労働者派結成という激動のなかで、思想検事による絶対主義的天皇制の容認、転向の強要とのたたかひの途上にあつた。千代子を思想的、理論的にリードしてきた夫の浅野晃が途中から市ヶ谷刑務所の獄内で転向していく過程は千代子には耐えがたい屈辱であつた。

千代子の激動を伝える「獄中最後の手紙」3通(7月26日明け方までかかつて2通、29日の1通、浅野の母ステさん宛。後出)がそれである。気落ちしつつも水野・浅野らと訣別し、ふたたび立ち上がっていく決意で手紙は終わっている。この直後に転向を完結させた浅野の「上申書」(7月26日付)に接した千代子の怒りと苦悩が爆発した。

そうして1929年8月1日から17日まで、千代子は市ヶ谷刑務所独房で、弾圧性拘禁精神病特有の劇症を繰り返し、半狂乱状態に置かれたが刑務所側は何ら措置することなく放置した。女子房の同志たちが繰り返し病院への収容を訴え、抗議したが容れられず、ために病症を重くし、刑務所側がどうしても手に負えなくなって初めて東京府立松澤病院へ収容した。

これが女子房の同志たちの見聞した千代子の「最期」であつた。その千代子が病院で次第に混乱を克服し正常に戻りつつあるときに「肺炎」により24歳の生涯を閉じたのである。この部分は獄中の同志たちは知ることは出来なかつた。市ヶ谷刑務所の同志たちが千代子の死亡を知つた時、その「印象」は、独房で錯乱し、のたうち回る姿であり、松澤病院での回復経過は捨象されてしまつた。彼女たちが獄外に出た時、その「狂乱」の姿が語られた。福永(是枝)操氏などの戦後の出版物での千代子の記述はその典型例である。山岸一章氏や歴史学者の犬丸義一先生でさえ、その記述から出発されてつた。

プロレタリア・ルポ作家の山岸一章氏が、1970年3月15日「赤旗」所収の掌編ルポ「信濃路」で伊藤千代子の墓所を訪ねたことは前章で触れた。山岸氏は、早い時期に伊藤千代子の事蹟に注目してつたが、この時は、「書く予定がないが」と断つて、彼女の墓所へと向かっている。山岸氏は、千代子の事蹟をメモしてつたのに、敢えて「書く予定はないが」と断つてつたのは、その場面に立ち合なかつた者にはわからない微妙な言い回しがある。「あまりにも傷ましい最期」という表現にも、千代子を評価しきれない苦渋がみられる。

このように、治安維持法弾圧が千代子の死因さえも正しく伝えるのを「阻止」してつたのである。

もちろん、山岸氏は伊藤千代子の事蹟を先駆して取り上げた自負を忘れずについて、『新版革命と青春—戦前共産党員の群像』(1985年6月執筆)では、「あとがき」に次の文章を挿入してつた。

『不屈の青春』『革命と青春』の二冊で調査した戦前黨員は、西田信春の記録のなかで紹介した吉田寛を含めて二十二人です。このほかに、夫浅野晃の裏切りであまりにも傷ましい生涯を終えた伊藤千代子の記録は『信濃路』として、一九七〇年三月一五日の『赤旗』に発表しました」と。

私は、山岸一章氏にもしも、取材の時間が与えられ、取材費が準備できたら(特定の収入の無い氏は、雑誌掲載の原稿料が出ると、次の対象者の取材に出かけてつた)必ずや、また、

伊藤千代子の生涯(正史)に挑んだであろうと確信する。

また、この「歴史的文書=名簿」を編んだ人々の名誉のために、私はあえて、戦前の犠牲者救援会の伝統を戦後に引き継いだ人々(今日の日本国民救援会)の手による戦後1948(昭和23)年の第1回「無名戦士墓」(青山霊園内・戦前、細井和喜蔵の『女工哀史』印税相当分により藤森成吉氏らにより建立)に小林多喜二や山本宣治らとともに合葬された時の伊藤千代子についての正確な記述(『解放のいじずえ』57頁所収)を紹介しておきたい。

伊藤千代子 1905-1929

長野県湖南村に生る。諏訪高女を卒え2年ほど小学校代用教員を務めた後、仙台尚綱女学校に学び卒業後上京東京女子大に入学、社会科学研究会に加入して活動。1927年(昭和2)中退して運動に専心、日本共産党に入党、3・15弾圧で検挙起訴され、未決在獄中、非転向のまま29年9月24日獄死した。享年25。

今日の伊藤千代子研究の到達点に立ってみても、きわめて正確な記述である。戦後の混乱期にあってもここまで正確な記述に到達していたことに改めて敬意を表したい。

さらに注目されるのは「獄死」という記述である。千代子の場合、松澤病院での病死ではあるが、あくまでも市ヶ谷刑務所での「非転向・未決勾留中」の発症で、回復すれば、また市ヶ谷刑務所に収監される身であった。松澤病院での「治療」は、市ヶ谷刑務所収監中の延長線上にあったのである。

治安維持法陪同盟中央本部の犠牲者名簿(2015年刊『獄死者』)に伊藤千代子の氏名を掲載した所以でもある。また、冒頭詠歌にもある土屋文明の「獄に死にき五年(いつとせ)がほどに」とも文意が合致していることも指摘しておきたい。

★長野県内の「縊死説」と克服

日本共産党長野県委員会発行の『解放をもとめて』(1984年7月15日)は、千代子の死因について次のように触れている。(32-33頁)。

「またこれらの(3・15事件、4・16事件)弾圧のなかで、党中央の指導部において3・15事件で検挙された水野成雄(三夫)らは、獄中で完全に敵に屈服し、『天皇制支持』を表明し、日本共産党の解体を主張する解党派グループを組織し、『日本共産党労働者派』を偽称して転向し、運動を裏切るとい破壊活動を行った。

かつて諏訪中学(現諏訪清陵高)の教員として諏訪を中心に県下の運動にも一定の影響を与えた浅野晃はこの『解党派』の一員となった。その妻、諏訪出身の共産党員伊藤千代子は、そのあと縊死したが浅野の裏切りが原因といわれている」

当時の編纂委員は物故していて確めるすべはない。次の県党史が編まれる場合には、正しい死因が示されることを切望したい。戦後40年近く経ってもこうした事例が生まれているのは、治安維持法下の弾圧が一人の人間の生・死さえも歪めてしまうことを示している。

この縊死説は、日本共産党中央委員会の1992年の宮本顕治議長の冒頭発言、94年の『日本共産党の70年』史での顕彰記述によって基本的には克服された。

また長野県内では、藤森明氏の1993年の「民主長野」(党長野県委員会発行)への寄稿連載13回という長期連載によって、「名誉回復」の措置がとられたものとしたい。

そして、その直後に治安維持法同盟長野県本部が、藤森明氏の「伊藤千代子の生涯とその時代―夜明けをめざす不屈の青春」のパンフ化と大量普及運動に取り組まれる中で、長野県内はもとより日本全国に伊藤千代子の生涯(正史)が定着する基礎を創り出したのである。

★千代子の薬殺説―伊藤初祢さんら親族

1969年9月、伊藤千代子の墓所は、裏山の龍雲寺にあり(=現在は、中央道上の霊園内の現在地に移動)、山岸一章氏は花を手向け頭を垂れたのである。墓石が母方の岩波家によって建造されたことも明かされる。そのとき案内に立った、千代子の外戚の伊藤初祢さんは驚くべき発言をしている。

「もう、しゃべっても大丈夫でしょうが、伊藤千代子はほんとうはお上(おかみ―天皇制権力)に毒を盛られて死んだのです。亡くなった従兄弟が脳病院(―東京府立松澤病院)に面会に行ったときは、正気に戻っていました。従兄弟が帰ってくるとすぐに死んだという電報が来たのです。元気だったものが二、三日で死ぬわけではなく、殺されたんですよ」。

まさか(山岸氏)

「いや、確かに毒を盛られて死んだんですよ。親類の者は、みんなそう考えているんです。大きな声では言えませんが、たてついたものにお上は何をするか、わかりませんよ」

山岸氏の、この文章に拠れば、千代子の最期は、急性肺炎である、とされている。前項での「狂死」と矛盾しているが、ここではそれは問わない。むしろ、戦後24年経っても(=山岸が取材したのは1969年秋)、親族が千代子を愛おしみ、あたら24歳で「お上」に殺されてしまったこと、言葉を変えていえば、治安維持法弾圧で抹殺されてしまったことに真正面から抗議し、むごいことをしたものよ、と問い糺していること言葉として受け止めたい。

(三) 『時代の証言者 伊藤千代子』と

「増補新版」(発刊から10年)への研究成果の反映

こうして私は、先行する研究者の研究成果を尊重しつつ、その到達点を引き継いで、なお従来の伊藤千代子論の中にあつた不明確な部分の一つひとつ解明していく作業を連続しているが、1990年代からの約30年間で突破して来た内容を10年前から『時代の証言者 伊藤千代子』(2005年7月初版)に、さらには「増補新版」(2020年8月初版。現時点では第7版・2023年3月)に反映してきた。その「突破口」となった事例を時系列的に(千代子の生

涯にそって)一覧してみたい。その以後の解明事項は、『治安維持法と現代』誌(治安維持法
 国賠同盟中央本部機関誌)に随時収録掲載の形をとって今日に至っている。

	項目	主な内容	所蔵・提供先
1	千代子から小学校時代の級友・五味よ志子さん宛ての47通の手紙	小学校恩師川上茂との「恋愛」との訣別/仙台行きの実意/仙台での新思潮との出会い/東京女子大でベーベル『婦人論』に到達	故葛城誉子(五味よ志子次女)所蔵
2	尚絅女学校での事蹟とクラスメイトの証言	学籍簿の発見 級友たちの証言	尚絅女学院大学 加藤みつさん
3	ジェンダー平等思想への接近	五味よ志子さんへの手紙	故葛城誉子蔵
4	東京女子大時代	学内=社会科学研究会 安井てつ学長文書	東京女子大学・女性学研究所
4	女子学連の結成参画から組織運営	『女子学連』の形成と伊藤千代子の役割	『改造』31.8月号。文部省思想調査局「思想調査資料24輯/1934
5	労農党時代=	第1回総選挙、労農党候補と千代子	伊藤千代子追悼録
6	山一林組争議支援		同
む		浅野晃訳『哲学の貧困』千代子サイン本	穂別町・富内資料館
7	共産党員時代=1928.2.29	入党時活動居所の特定/ 党秘密印刷所持参文書の特定 市ヶ谷刑務所生活の全体像	『現代史資料』 女子党員獄中記
8	卒業資金抛出问题の新たな考察—多喜二「東俱知安行」考察		追悼録/拙著・小林多喜二と盟友たち
9	獄中闘争	『女子党員獄中記』 「ウエルカム・ニシムラ」挿話—西村櫻 東洋(おとよ)文書の発見—	原菊枝著 西村櫻東洋追悼録
10	獄中最後の手紙4通の発見	浅野淑子(晃妹)・ステさん(晃母)宛 29/5/.8、7/26—2通、7/29	富山忠弘/苫小牧市立中央図書館
11	府立松沢病院= /特高警察の監視病棟/	診療観察記録の発見 特高課長死亡報告書	秋元波留夫提供
12	「伊藤千代子追悼録」	1929.12 喜入(浅野)あや子編・ガリ版 刷り	東栄蔵所蔵提供
13	追悼	又従姉妹・平林せん 在コミンテルンの片山潜の言及論文	追悼録 片山宣論文集
14	「訊問調書」とその核心	「訊問調書」第1回—4回	非開示

15	「弔意と香典」文書	服部之総他著名人連名	五十嵐仁教授提供
16	増補新版での突破口 とくに「増補新版」では今世紀・2000年代に入って発見された諸資料や、その後の調査の中での私の認識の発展を随所に取り入れている。例えば、千代子が党の秘密印刷所で検挙された時、とっさに偽名・村田かず子名を名乗り同志への連続的検挙を断ち切ろうとしたことなど、旧著部分以降の新しい知見が随所に盛り込まれている。その詳細は拙著参照。増補版では、「補章」を設けて伊藤千代子の生涯についての研究でのさらなる突破点と新しい知見を取り入れた。		

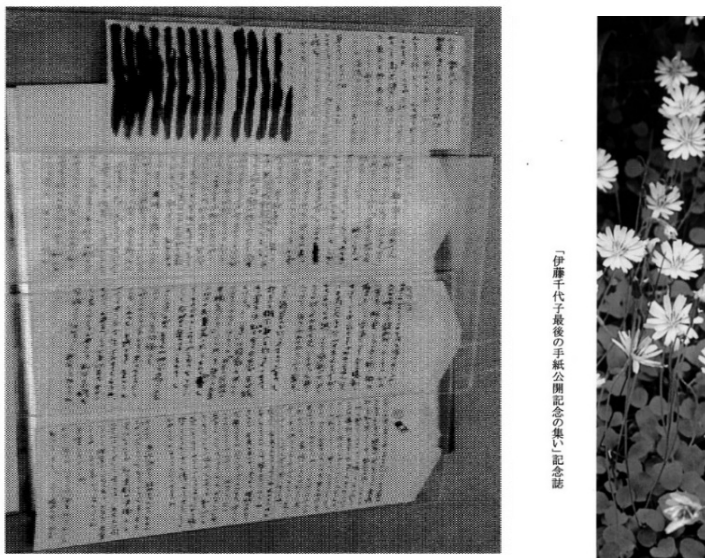
(四) 「千代子の戦う手紙ほりおこし

顕彰つづける勇私の衆清し」

—獄中からの手紙を追って20年



▲「幻の手紙」が目の前に



- ① 公開された4通の手紙(上から1929年 5/8・7/28= 2通・7/29)、撮影・藤田廣登
- ② 『地しばりの花』——伊藤千代子獄中 最後の手紙と「集い」講演録。2005 年刊

入手の経過 戦後いち早く伊藤千代子の研究を開始した東栄蔵氏は、1970(昭和45)年に浅野晃氏(以下敬称略)と直接面談し、聞き取りと伊藤千代子の貴重な資料を譲り受けた唯一の人である。これからの論説の整理のために、東氏が譲りうけた資料3点を掲出する。

1	伊藤千代子追悼録	浅野(のち喜入姓)あや子作成・ガリ版刷=B4 二つ折り・裏表 1929年12月作成	約半数が現存(獄中書簡の一部も含む)
2	獄中書簡(封緘はがき) 1929年	伊藤千代子の市ヶ谷刑務所からの浅野の母ステさん宛の3通と淑子さん宛の1通	1970年、東氏に提供されたあと78年に浅野の懇請で返却→苫小牧市立中央図書館に送られ図書館蔵。2003年畠山忠弘氏によって「発見」・2005年公開
3	千代の死	400字詰め26枚	2005年苫小牧市立図書館に寄贈

東氏の私への回想によると、何度も浅野氏を訪ねたが自宅へ招じ入れられず、たまたまミネ夫人の不在の時に初めて2階の部屋へ通され、懇談の中でともにアララギ会員という共通項もあり、上記資料が提供されたという経過である。

「伊藤千代子追悼録」 この「追悼録」は、伊藤千代子の没年の1929年12月、浅野の妹のあや子さんが謄写版刷りで作成し、関係者に配布したものである。戦後、浅野家で子供たちの雑記の裏紙などに使用されていたため約半数が失われ、東さんに提供されたものはB4判12分である。伊藤千代子の社会科学研究会メンバーや郷里の友人への手紙、追悼録のために寄せられた友人の思い出や追悼のことば、関係団体の声明、追悼文などを含むもので、当時の千代子を知る第1級の資料である。もし、完本が発見されれば、より豊かな千代子を取り巻く当時の状況をリアルに知ることが可能である。完本の探索は今後の千代子研究の残された課題の一つとなろう。

「獄中からの手紙」を追って 東氏が預かった第2の資料は、千代子が29年5月と7月に浅野の妹の淑子さんと母ステさんに出したものであるが、東氏の手元に置かれた後、8年後に浅野から返還要請がきて、再度、浅野の手に戻された経過のものである。東氏はコピーを取らずに返却したためどういう内容のものかは不明となっていた。

浅野からは、返却のお礼と「苫小牧市立図書館に収蔵される図書資料とともに寄託される」ことを示す手紙が寄せられている。東氏は、のちに私に、「東に預けたが、東はどうも左翼に関係しているのではと疑い、将来、『悪用』されたら困る」と考えての返却要請だったと打ち明けられた。東氏は、長野県で著名な国文学者、教育者であるが、おそらく長野県内の高等学校長などを歴任している段階で解同(部落解放同盟)と関係しているのではないかと疑念が生じたものと推測されたようである。

一方の私は、松澤病院に収容された千代子の資料発掘に次ぐ、次の課題を東氏の手元を離れた「千代子の手紙」の探索にかかるとした。思い切って東氏に会うことにしてお訪ねした。この時東氏は、面識のない私が紹介状もなく尋ねたこともあり、少しく警戒されたよ

うである。面談の場所を長野市内妻科の公園のベンチを指定されてきた。先生は私と会ううちにたちまち緊張感を解かれ、友好的な話合いができた。以後、私との「師弟」関係はゆるぎないものとなり、千代子の事績研究の成果を報告するたびに懇切なる達筆の激励の手紙を亡くなる直前までいただくこととなった。手紙の書けなくなった頃からは電話での直接の会話が続けられた。新しい研究成果をお伝えするたびに電話口から喜びの嗚咽が聞かれた。

浅野晃のなぜ苦小牧か— さて、浅野がこの手紙を苦小牧市立図書館に収蔵しておきたかった理由は二つある、と私は考える。

一つは、自分の転向後の戦前と東京大空襲で焼け出されて以後の戦後の5年間を国策パルプ(転向組の水野成夫、南喜一らが戦時中に陸軍と結託し、中国から再生紙工場の製紙機械を奪ってきて作った大日本再生紙の後継会社。今日の日本製紙)に役員対偶で招聘され、勇払地域を中心に駆け巡り「名声を博した聖地」—絶大な尊敬を集めた、この地こそ自分の業績を集中・集積するにふさわしいと考えたことであろう。

二つ目は、この地だけが自分の要望を快く受け入れてもらえる安心・安息の場所である。

こうして、浅野の膨大な蔵書・資料は苦小牧市立中史図書館と穂別村(当時の横山村長と意気投合。現むかわ町富内・銀河館)に分割所蔵されることとなった。「国際的にも有名な文化人が5年間もこの地に活動していた」ことから名誉市民的破格な扱いであった。

だからこそ、この地なら千代子の痕跡を外部の者からも遮断できる遠隔地という、浅野特有の判断がそうさせたのであろう。この「手紙4通」のうち、3通は、のちのち詳細に探索をかける者が現れたら、自分の「戦前の経歴上の恥部」をさらけ出すことになる、自分の今の地位・名声、詩人・文学者・研究者の経歴に傷がついてしまう恐れ—それには自尊心が耐えられない。

私は、当初、苦小牧は擬態で(苦小牧図書館は、何人もの先行研究者が問い合わせたり、尋ねたりしても「手紙」はありませんという返事が統一して回答されていた)、教授である立正大学図書館蔵を疑ったことがあるが、東先生は東京の大学図書館では「いつ発見されるか」という不安・危険性が残る、と否定された。

東先生の「確信」は、浅野が苦小牧図書館長に「4通の手紙」を寄託したときに付けた手紙の存在に裏打ちされるものであった。しかも、文面には「自分の生存中は公開しないで欲しい」とある、というのである。

まさに「わが亡きあとに洪水よ来たれ」(=あとは野となれ、山となれ)である。逆に考えれば、わが亡きあとには公開してもよい、とも解釈できる。図書館長は諸刃の剣を背負ったことになる。そしてそのことが現実となったのである。

2001年春、日本共産党苦小牧市議会議員・畠山忠弘氏が、「手紙の存在」を証明する種々の資料を携えて図書館長を訪ねてきたのである。それから2年間「有るか、無いかわからない」という問答が続いたが、畠山氏の誠実な懇請に「探してみる」との回答が寄せられ、そしてついに要請が実る日が来た。

その間2年間、こうして2005年4月1日の「手紙公開日」を迎えた。この2年間の畠山氏の苦難に満ちた、また、希望に満ちた「探索」についてはすでに氏の筆になる諸論考があ

る。「発見」の第一報はまず東先生に差し上げた。先生は、電話口で号泣された。

千代子最後の手紙が示すもの 獄中からの手紙4通は、①小学校時代の級友・五味よ志子さんにあてた47通の直筆の手紙、②東京女子大・安井てつ学長文書、③『女子党员獄中記』(原菊枝著)、④松澤病院の病歴記録(『精神神経学雑誌』1937年。野村章恒論文・あきちか)などとともに、千代子の24年2か月の生涯に残された貴重な「原・生資料」である。

このうち、①47通の直筆の手紙は所蔵者の公開の許諾が得られないまま死没されたためかなわなくなっている今日、苫小牧市立図書館の手紙4通は、千代子の生きた姿を伝えるかけがえのない第1級の「資料群」となった。

① **浅野淑子さん宛** 浅野の妹の淑子さん宛 29年5月8日付、市ヶ谷刑務所から発信。すでに捕らわれて1年2か月の獄中にあっても千代子の細やかな、みずみずしい感性あふれる手紙となっている。信州では地しぼりの花は「強情っぱり」な雑草で、抜いても抜いても、踏んでも踏んでも生えてくるので百姓からは嫌われている。この雑草花に思いを込めて描く千代子の感受性、同時に、踏まれても立ち上がっていく雑草に自らを重ね合わせている逞しさも感じる。

文中、「野方町」は現在の中野区野方、浅野一家の居宅のある場所である。中段の墨振り部分はこれまで検閲のためとされる説が多い。私はもう一つの可能性、千代子の最後の手紙(29.7.29付け)の「淑ちゃん、御きげん如何? こないだは(この間は)まっ黒なご返事を差上げてほんとうに御めんなさいね」に注目する。転向攻撃の激化のなか、千代子の身边に一時的な混乱があったにも関わらず、こんなにも細かい気遣いをする千代子の心根、記憶力、精神力に驚嘆するのである。墨塗りの部分に何が書かれていたのかの研究には「手紙の全面公開」が必要である。歴史の歯車が回った時、千代子がここで浅野綾子さんに何を語りかけようとしていたかが明らかとなろう。この手紙は、前項の「伊藤千代子追悼録」には未収録である。

② **浅野ステさん宛 2通連続** 29年7月26日、次いで明け方までかけて第2信が発信される。この手紙は「追悼録」にも収録されていたものである。

まず気づくのは、千代子の異常な高ぶりである。興奮して明け方まで眠らずに出紙を書き続ける冷静さを失っている千代子の姿である。「あれから昨日まで裁判所に行きました」から類推されるのは、彼女が何回も自分とは別の人の一治安維持法立件事件の裁判の傍聴に引き出されていたことを示唆している。そこでの被告人の弁舌を聞いて、同感し、そのなかに義母ステさんの「最愛の人(浅野晃)」も入っている。それを一刻も早く伝えたい、という感情の高ぶり、高揚感そのものの文面である。

彼女の同感が「日本の民衆の幸福の為に！」という、自分がいま全身全霊をかけて戦っている方向性と一致するスローガン掲げた集団一の中に「母さん、あなたの最も愛する、そして何よりも自分の最愛の同志浅野晃がいる」という安堵感が噴出している。夫は転向しないで頑張っている、と。

それには理由があった。この年の5月に入り、市ヶ谷刑務所収監中の党事務局長の水野成夫が平田勲思想検事の攻撃に屈し、「絶対主義的天皇制を認めて」転向し、彼と目下

の盟友関係にある夫浅野の動揺する動静が伝えられ、女子舎房のリーダー格の千代子には耐えられないほどの心配ごとであった。

その中核に「つまり、浅野晃につながる人たちの裁判、水野成夫ら共産党指導部の獄中転向組の裁判の傍聴に連れ出されたり、思想検事の下での水野ら転向組の「上申書」を「読まされて」いたことである。つまり、獄中のリーダー格の千代子に集中攻撃が加えられていく時期でもあった。女子舎房の同志たちが、獄中通信などを通じて結束して転向に対峙していたのである。彼女を「追いおすこと」が女子舎房の団結を打ち砕く要であることが思想検事側の中心に据えられたのである。

そこで裁判の傍聴という違法な行為が取られた。「被告」たちが、そこで「日本の民衆の幸福の為に」と称して転向の合理化と共産党の解体を主張していたのであろう。千代子には、その前半部分のみの「傍聴」が意図的に組み込まれていたのに違いない。「党の解体、天皇制擁護」などは千代子が最も強硬に反対していたからである。

千代子の隣房に1年遅れで収容された西村櫻東洋(おとよ。映画で「ウエルカム ニシムラ」のエピソードが描かれた)は、千代子が何度も裁判所に引き出されていくのを書き留めている。

{民衆の幸福の為に}はまやかしのスローガン

(筆者藤田は、1990年代にある党史研究家が「絶対に他人には見せない、喋らない」という約束で預かった水野側に与した活動家の、「上申書」のうち、彼らのスローガンの一部を記したページ部分を内緒で見せていただいた。そこには明らかに「民衆の幸福の為に」という主張が述べられていたのである。メモも、筆署名も取らないという約束の数秒の文面を目で追う瞬間であった。見せていただいた場所といまは亡き研究者もはっきりしている。時間が許されれば、その精確な探索も私個人の今後の課題となろう。

「日本の民衆の幸せの為に」という発言が千代子の内心を貫いたのである。しかもこのスローガンを叫ぶ青年のグループに、転向したのではないかといわれた愛する浅野もいる!。浅野は転向などしていない! それを一刻も早く、義母に知らせなくては、はやる気持ちをそのまま封緘はがき書き始める。書き足りない! そこで次の封緘はがき書き足していく、一睡もせずにペンを走らせていく千代子の姿が見えるようである。

*ここに登場する「大山」は大山郁夫(労農党委員長)、「細迫」は細迫兼光(労農党書記長)。検挙される前の千代子が浅野晃の手伝いで労農党書記局に出入りしてよく見知っていた。

劇転の二日間 千代子は、前便の最後を「次便にて」と結んでいた。しかし、彼女は前便のあと、思想検事らの仕組んだ「謀略」にからめとられかけている自分に気づいた、と思われる。7月27日から28日の二日間に何があったのか。この空白は今日まだ埋まっていない。

考えられる一つは、千代子が激しく興奮して義母にペンを走らせているその日-26日に浅野は平田検事の誘導で「転向上申書」を書き上げているのである。その時彼は「この上申書を千代子にだけは絶対に見せないでほしい」と懇願している。なぜと問い詰める検事に浅

野は「純粋な彼女が大変なショックを受けるから」と言っている。自分の後ろめたさと、千代子には転向は絶対に知られたくない、という彼特有の気持ちがないまぜである。知られれば、これまで千代子を理論的にも実践的にもリードしてきた、その一切を失うのである。

この「上申書」を千代子がいつ読まれたのか。27日か28日だという説があるが日程的に無理があろう。保留して次へ進もう。

次便－生前最後の手紙 こうしたなか29日付の「次便」が書かれる。

私は、2003年に畠山氏によってこの「手紙群」が発見されるまでは、下表左の「追悼録」に収録されていた手紙が千代子の全文だと思っていた。そこには千代子の放心状態のみが見え、一路、混乱へとつなげて読みくだしてしまい、彼女が再起を図っていくというメッセージを十分に読み取ることができないでいた。

苫小牧発の「手紙情報」は、冷静さを取り戻した千代子が、裁判所で聞かされたあの「スローガン」の裏に潜んでいる危険性を何らかのきっかけでつかみとった、ことの一点を指している。

まず読者との相互理解の為に「追悼録」と苫小牧で発見された「直筆手紙」との異同を表示してみよう。

浅野あや子編「伊藤千代子追悼録」所収文	苫小牧市立図書館所蔵の直筆手紙の文面
<p>お母さん、次便で委しくと申し上げましたがもうその必要がなくなってしまうました。理屈がいやになりました、身の程知らずの私を笑ってくださいまし。</p> <p><i>－この間の文章はすべて省略されていて、「なつかしいみなさん」と続けられている</i></p> <p>なつかしい皆さん、心から感謝と祈をお受け取り下さいまし、美しく晴れた夏の朝、又、</p>	<p>お母さん、次便で委しくと申し上げましたがもうその必要がなくなってしまうました。理屈がいやになりました、身の程知らずの私を笑ってくださいまし、監獄の御飯をこんなにおいしく頂いた朝はございません」……略(略部分は『地しぼりの花』参照</p> <p>淑ちゃん……略 (以下、浅野の弟妹)</p> <p>虎ちゃん……略</p> <p>あや子さん……略</p> <p>なっちゃん……略</p> <p>……私も真剣に準備している。せんさんはもうずんずん歩いてる！あなたに向かふとどうも理屈がいひたくなる。お互いに自重しようね。今年は暑いから気を付けてね。無理をしないやうにね</p> <p>なつかしい皆さん、心から感謝と祈をお受け取り下さいまし、美しく晴れた夏の朝、又、</p> <p>七月二十九日 牛込区富久町 112 伊藤千代子</p>

右表文面では、千代子が覚めた目で浅野らとの関係を清算し、「私も真剣に(起つ)準備をしている。せんさんもずんずん歩いている！」と続けている。ここに浅野らと決別し、真剣に再起を準備をしている、という千代子のメッセージが隠されていたのである。そして続く「せんさん」は千代子の又いところで諏訪の紡績女工出身。千代子の援助で上京。全協繊維労

組の活動家になり、千代子らの要請で新潟県の労働者の組織化と長野県の繊維労働者の闘いの援助の為に新潟県に派遣され、「3・15事件」で検挙され、新潟で唯一の女性被告となり新潟刑務所に収監されていた。千代子は獄中でそれを知り、浅野の妹たちを通じて差し入れの依頼をしていたのである(映画・「わが青春……」では平川ふみ役で登場)。

*「牛込区富久町112番地」は市ヶ谷刑務所の住所表示。牛込区は今日の新宿区である。

千代子は強い復元力をもって、階級闘争への復帰を決意していくのである。

それは転向した浅野との訣別であり、浅野一家との永訣をも意味していた。手紙の中葉に展開される浅野の母、弟妹たち一人ひとりの名前を挙げて呼び掛けているくんだりがあることを示している。

この発信の29日から3日後の「8月1日、挙動に不審なる様子見ゆ」(「刑務所記録」刑務所から松澤病院に回付された報告書による)とされる。一時的な混乱を脱しつつある千代子に執拗な思想検事からの転向攻撃の追い打ちがかかったのである。

浅野の転向の軌跡 この時期に浅野は7月26日に転向、下記の「上申書」を書き上げて平田検事に提出している。

「…此病根ヲ一掃スル為ニハ日本共産党ヲ只即時ニ解体スルヨリ道ハナイト思ヒマス。
吾々ハ日本共産党ヲ捨テスカル腐敗墮落ノ伝統ヲ打破シ正シキ政策ヲ確立シテ真ニ民衆解放ノ先頭隊タルヘキ労働者党ヲキタエ上ゲナケレバナラナイト思ヒマス」

浅野が「此病根」と書いているのは、目上の盟友、水野成夫(当時、党中央事務局長)が平田検事の誘導に屈服し「日本共産党脱退に際し党员諸君へ」と題する「上申書」に書いている内容——コミンテルンの支配下の党には自主性がない、党は民衆から孤立している、その原因は中央幹部の墮落と君主制(天皇制)廃止の主張にある、としたことである。「民衆解放の先頭隊たるべき労働者党」とは、水野の絶対主義天皇制の下での社会主義を目指すとして、日本共産党労働者派の結成を呼び掛けたことを指している。

浅野がそれに同調して転向を完結させたのである。

千代子が検事らの謀略でこの「上申書」を読まされたのは、7月30日から31日の間である可能性が高い。それが8月1日の「挙動不審」につながるのではないか。千代子の苦しさ、心の痛みが一挙に、最高時にまで引き上げられたのである。彼女の精神的緊張が一時的に閾値(いきち・限界)を超えたのである。それは千代子の弱さではなく、千代子の人民への奉仕の信念の高さと表裏一体のものである。

当時、同じ市ヶ谷刑務所でこうした転向攻撃にあった鈴木清(秋田県出身)は東京モスリン亀戸工場飯島喜美と共産党細胞を作って、工場新聞「鬼車」を発行(読者60人)した同志である。その鈴木清の作品『監獄細胞』にこの「事件」に遭遇した時の描写がある。

「…昨日まで自分の指導者として信頼していた者が、自分達を裏切ったばかりでなく、今日は敵の手先として自分たちに立ち向かってくる。それはとても信ずることができないほどの出来事であった。それは何ともいえぬくらい不安と、恐怖と絶望をさえ感じ

させた。

かれはその後数日の間、あとからあとからこみあげてくるにがい胆汁をかみしめるような気持ちになやまされた。体のうちから分泌してくるにがさをかみしめねばならぬというそうした気持ちのものだった…」

松澤病院での伊藤千代子の「病歴記録」を発掘し、それ以降の最晩年を、「治安維持法弾圧性拘禁病」についての研究に生涯をささげた秋元波留夫医師は、

「治安維持法による拘禁精神病が一般受刑者のそれと異なり病症が重く、他項で、分裂病に酷似するのは、原因となった精神的苦悩、精神的外傷が強烈であり、分裂病様症状が強烈な精神的外傷に対する生体反応であるからであります。この意味で、治安維持法による拘禁精神病は「心的外傷後ストレス障害－PTSD」ともいうべきものであり、治安維持法はPTSDを生む悪法であるといわなければなりません」（『実践精神医学講義』第32講）

と指摘している。

伊藤千代子にかけられた暴圧がそれである。

転向後の浅野晃の軌跡 釈放された浅野は「日本共産党労働者派」に参加したが長続きしなかった。思想的には「日本浪漫派」に属し、戦争協力の為に翼賛体制に組み込まれ、少年向けの忠君愛国本の執筆、ついで「ペン部隊」の一員として、中国大陸、ジャワ(現インドネシア)に出かけている。

敗戦後、苫小牧の国策パルプの水野成夫に招聘される形で5年間過ごし、反マルクス主義の文化、講演活動に、ついで上京、詩集『寒色』で読売文学賞、立正大学教授を歴任、晩年は、超右翼の影山正治へと傾斜し、『英雄 色を好む』などの対談には知性のひとかけらも感じられない。1990年89歳で死去した時には超右翼団体・大東塾の黒づくめの人たちが葬儀場を埋め尽くしたという逸話が残された。

一方の水野は、戦後、財界に入り、文化・フジ・産経などのグループの役員を歴任、あくどい労働組合つぶしを常とし(今般の「フジテレビ問題」の遠因もそこに求められよう)「フジ・産経グループ」の総帥として悪名をとどろかせた。一転向者の末路である。

エピローグ 勇払の衆清(すがし)

—北に一星あり、その輝度強し

本稿の前半に千代子の山懸選挙カンパについての調査行・小樽往復の旅にふれた。この時は、「千代子と多喜二」がテーマであった。今世紀に入り「千代子と苫小牧」が主要なテーマとなった。

畠山忠弘氏と藤田の「出会い」がこのテーマの出発点であった。氏は見ず知らずの私から

の「伊藤千代子の手紙の探索依頼」を私以上に熱心に追求した。その数年に及ぶ探索があって今日がある。千代子は、2歳半で両親と死・離別せざるを得なかった。その上に治安維持法弾圧は、郷里の諏訪での彼女の痕跡を示す一本来保存されてしかるべき原資料の殆どすべてとっていいほどのものが失われて闇に葬られた。「獄中最後の手紙」は、千代子が生き・戦い抜いた24年の貴重な証(あかし)である。それを漆黒の闇から救いだしたのである。

それだけではない。穂別町では、教育委員会との間を中野久嗣共産党町議(のち故人)にパイプをつないでいただき、斎藤征義氏の案内で、国鉄富内駅隣接の浅野晃資料室調査を行い、千代子サイン入りの蔵書『哲学の貧困』(マルクス著・浅野訳)を探し出すことができた。

当時、浅野晃の苫小牧周辺での影響力は大きく、どちらかといえば千代子はタブー視されていた。浅野の略歴では千代子との結婚は抹殺されたままである。穂別富内駅浅野資料室には立正大学の学生たちが蔵書や資料の整理をしていて、その冷たい視線の中での調査行となった。

また、私は浅野が死せる千代子との対話を試みたとする『幻想詩集』(浅野が限定私家版で発行した長編詩)なるものは知らなかった。浅野に師事し、交遊のあった中学校教師の入谷寿一氏は、この詩集に出会い、死者(千代子)を自分の思想の理解者・同調者として描く「偽善」に違和感を持たれて浅野と訣別を決意された。そして、以後、苫小牧での伊藤千代子顕彰運動に身を投じられた。まだ少数の人々の集団に身を投じることの厳しさをひしひしと感じつつも真理を貫く道を選ばれた。そして2020年には『治安維持法と現代』誌に「浅野晃『幻想詩集』を読む—伊藤千代子への思いと救済を求めて」を寄稿された。

石城謙吉氏(いしがき、元北大苫小牧研究林長・北大名誉教授)は、2005年の「伊藤千代子最後の手紙公開の集い」で実行委員長をつとめられた。石城氏は、千代子と同郷、姉は千代子の後輩、自分は浅野が一年だけ英語教師として赴任した諏訪中学(旧制)の後身、戦後、諏訪清陵高校となった卒業生という関係であった。氏はのちに私どもの要請に応じて『治安維持法と現代』誌2021年秋季号に「伊藤千代子の夫 浅野晃について—その動向と軌跡」を寄稿された。

S氏は、浅野が「水野成夫から国策パルプの工場長社宅を提供され、役員待遇」で勇払原野を回っていたという貴重な証言を寄せられ、以後、私の鶴川町・穂別町などへの遠路の案内同行を欠かさず受け持っていた。

手紙の映像化—映画「わが青春つきるとも 伊藤千代子の青春」余話 映画は、千代子の死への要因を誘発した浅野晃の転向後の戦前・戦後の軌跡をエンドロールで描いた。千代子と正反対の生き方をした人間を映像で紹介したことに「千代子を汚すことにつながらないか」という異論が若干だが寄せられた。その方たちには、千代子に犠牲を強い、日本の侵略戦争に加担した浅野を映像で批判的に取り上げ、公職追放された(戦争犯罪人としての)浅野の戦後を批判的に取り上げることは社会進歩の観点から譲れないテーマであることをお伝えした。

桂監督は、「浅野は伊藤千代子の生き方に強い影響力を与えた人物です。浅野の戦前・戦後の生き方を批判的に表現することで本映画のテーマを明確にすることにつながります。また石丸謙二郎が演じた特高は架空の人物ですが、戦前の民衆弾圧の特高たちを表現し、戦後も権力側の国民の敵として存在し続けている、ことへの警鐘の表現です」と語っている。

鑑賞した多くの方々から、エンドロールに「千代子の獄中最後の手紙」（苫小牧市立図書館所蔵）がスクリーンいっぱいにはぼっていく映像に感嘆の声が漏れた。見終わった後の質問の多くが、「なぜ苫小牧か」と共に千代子が獄中で手紙を書くシーンが欲しかった、というものであった。

「獄中最後の手紙」の外部への持ち出しには制約があった。しかし、苫小牧の心ある人々の英知と機転・努力が、ついに千代子の手紙を撮影し、映画本編での紹介を可能としたのである。それが千代子と、この映画の鑑賞者への最大のプレゼントとなった。

この映画のラストが千代子の未来への伝言の形で構成されたことは、社会進歩に貢献しようという、この映画の「質」をきわめて高いものに引き上げることに繋がった。

「こんな暗い、重いテーマの映画化は成功しない！」映画上映専門組織の人々の最初の感想であった。2020年初頭の伊藤千代子の映像化構想は、作る前から大きな障壁にぶつかっていた。「成功しなかったら誰が責任を取るのか」という声の方が高かった。従来、一般的であった「協力券方式」をとらず、関係組織と地域集団の中に「製作(資金)支援のための上映債権方式」という「奇策」が打ち出され、治安維持法賠償同盟はじめ自覚的民主諸組織・人士のバックアップを得て、製作資金の大半を生みだした。そしてその母体がそのまま上映会催行を担った。3年間で46都道府県、650会場、10万人余の鑑賞者はこうして生み出された。独立プロ系で今世紀初めての快挙となった。

この運動を苫小牧の地から、北海道はもとより全国への励ましを発信し続けられた。「獄中最後の手紙」発掘と伊藤千代子顕彰運動の積み重ねがその原動力であった。

映画の進化と未来形 製作資金の乏しい映像化の中にあつたので、最初から日本語字幕版の製作までは手が回らなかったが、上映運動の高揚がついにそれを実現させた。3年間の上映期間最後の1年間の上映に間に合わせて高齢者や難聴者から喜ばれた。そして、再び鑑賞したい人たちや、全国650か所の上映会地域から漏れた人々のための「個人観賞用字幕版DVD」の製作発売にまでこぎつけることができた。

われわれに時間が許され、条件が生まれれば、ハングル版、中国語版、そして世界人口の6割以上を占める英語圏版への挑戦が今後の課題となろう。若い世代への私たちからの「伝言」でもある。

また、こうした蓄積を、次期姉妹編「飯島喜美の不屈の青春(仮)」の成功的展開へとつなげたい。

小樽高商(現小樽商大)の人たちは小林多喜二を尊敬し「北に一星あり その輝光強し」と称える。私は、伊藤千代子の顕彰運動を持続されている苫小牧とその人々に尊敬を込めて「その輝度強し」という言葉を送りたい。

こうしていま、苫小牧とその周辺に「新たな戦前」を許さない決意を込めた伊藤千代子の旗が起ちあがっている。小林多喜二、山本宣治、野呂栄太郎らの顕彰運動に勝るとも劣らぬ顕彰運動の輪が広がっている。



意見交換と対話のために

藤田廣登(ふじた・ひろと)

〒277-0043 千葉県柏市南逆井 2 丁目 24-36

090-4527-1129 Mail=fujitahiro@outlook.com

◆ 次期映画作品「飯島喜美の不屈の青春」制作支援活動事務局

補論(一) 「女子学連」は存在したか—犬丸義一氏との対話

—「幻の書評」(2005年)をめぐる

伊藤千代子生誕100年にあたり、かねて「伊藤千代子と青春」(試論) No.1~14を執筆されていた藤田廣登さんによる『時代の証言者 伊藤千代子』が学習の友社より刊行された。伊藤千代子については、これまでも、藤森明、葛城誉子、東栄蔵、広井暢子氏らの研究があったが、本書は、以下に述べるような新史実を発掘し、150頁余におよぶ、ある意味で決定版ともいべき内容をなしているとは私は考える。

伊藤千代子については、『日本共産党の七〇年』に記述されて以来、その先駆者的意義についての評価は定まっている。本書は、郷里の先駆者として、藤田氏の執念とも呼ぶべき探索によって、幾多の新史実を発掘している点に意義がある。私は本書を贈られて一読し、その研究史上の寄与の大きいことに驚いている。私は著者から伊藤千代子研究について相談されたことがあるが、いままでもかなりの研究がなされており、新史実の発掘については困難だと内心思っていた。しかし、その執念ともいべき熱情によって、幾多の成果が挙げられていることに驚嘆した。

その第一は、尚綱女学校時代の学籍簿の発見をはじめ同学校時代の足跡が明らかになったことである。第二は、東京女子大学時代について、伊藤千代子だけでなく社会科学研究会の活動が復元されたことである。当時の学長安井てつ氏の配慮による資料の発掘をはじめ、その全体像が初めて明らかにされたことである。新資料や研究会メンバーらの回想によって、その全容を初めて明らかにしている。私などは波多野(福永)操氏、塩沢富美子氏などから断片的に聴いていたものが、初めてまとめて明らかにされた。この点はおそらく、本書の運動史研究における第一の貢献であろう。福永氏などは女子学連の存在について、「学連には性別組織はありえない」と力説しているが、問題は、著者が発掘した文部省思想局文書に見る女子学連の記述をどう評価するかにあり、今後の研究課題であろう。

その次に、山一林組製糸工場ストと千代子のかかわりを示す第二次資料の存在についてである。続いて、千代子が逮捕されたのが「亀井調髪処」(〒文京区湯島。全労連会館に隣接)であることの証明である。そして、生前最後の手紙の発掘である。

さらに驚くべきことは、松澤病院における伊藤千代子病歴記録の「発見」である。とにかく著者の執念は、松澤病院における秋元波留夫医師との出会いを実現させた。まさに歴史的邂逅であったとの思いを禁じ得ない。松澤病院は精神科という特殊な病院で、どこから接触するかは、私などには見当もつかなかったことであった。

著者の仕事は、もう戦前に関しては文書資料は出尽くしたし、運動関係者も亡くなってしまったので、戦前の運動史についてはいままで以上の進展は困難であるという私の固定観念を打ち破った。困難ではあるが、努力をしさえすれば、まだ道は拓けるということをまざまざと教えてくれたと言えよう。その

意味で、著者に脱帽である。

なお、本書では記述されていないが、『女子党员獄中記』の著者原菊枝は、石堂清倫氏によれば、東大新人会出身で、当時の共産党中央事務局メンバーであった中野尚夫夫人であるとのことである。著者には話したつもりではあったが、本書では記述されていないので、後々のためにここに記しておくことにする。

ここに掲出した「書評」は、ある研究団体の機関誌のために執筆されたものであり、執筆者はわが国の近現代史研究の第一人者である犬丸義一先生(1928-2015)である。浅学の私への激励を含むものであったが、ある理由から不掲載となり「幻の書評」となっていた。すでにゲラ校正が終り印刷直前の「書評」がなぜ不掲載となったか、その理由は機関誌編集者とその団体の責任者数人が共有され、私には知らされなかった。

しかし、私には理由は明白であった。それは、いわゆる「女子学連」不存在説を唱える福永操(=波多野・是枝)氏と親かしい関係にあった犬丸先生にとっては、「女子学連」が形成されつつあったとする私との見解への同意は難しいものであったと推測する。先生の真理と向き合う真摯な学究生活とその警咳(労働者教育協会、労働総研労働運動研究部会など)をうけつつ研究を続けてきた私である。先生は、この書評の中で、「今後の研究課題であろう」と指摘、さらに深め合うことの重要性を示唆されていた。

この問題をめぐって犬丸先生との対話は、その後も何回か行われた。私は、文部省・特高関係文書だけでなく、『改造』1931年8月号所収の三村さちよ名の論稿全文などを先生にお示ししたが、自説を撤回されず、そのままとなった。

こうして「幻の書評」は犬丸先生のご逝去と共に「廃棄」された。しかし、映画「わが青春つきるとも」を鑑賞された友人から「書評ゲラコピー」を保持していることを知らされ、私の保存文と同一であることが確認された。当事者しか知らない「幻」と思い込んでいた「書評」が部外者にも流布されていたのである。ここに掲出させていただいたのは、「論争」前の犬丸先生の拙著への激励ととらえ直し、あえて公表させていただいた。

—「女子学連」は存在した

戦前、女子専門学校の社会科学研究会やグループが形成されていくのは、1925年以降である。その先陣を切ったのが、東京女子大で、25年入学の伊藤千代子は、上級生・渡辺多恵子(のち志賀義男夫人)、同期入学の三瓶孝子(さんぺい・こうこ/福島高女卒)とともに最初からその運動に加わることとなった。そのうち伊藤千代子だけが、女子専門学校(戦前の学制では、女子の大学制度はなく「大学」を名乗ってはいるが「専門学校」扱い)社研の集合体としての「女子学連」結成時点から、1928年3月15日弾圧による終局まで重要な役割を果たした。

東京での社研の主力は東京女子大と日本女子大であり、東北では尚綱女学校、宮城女学校などに、それぞれに社会科学研究会あるいは少数のグループが存在していた。この研究過程で千代子の思想的開眼が尚綱女学校在学中の11か月間後半に開始されたことが明らかになった。そして、その間の人的つながりが、「女子学連」結成時から尚綱メンバーの登場を作り出したのである。

その全容を比較的精度の高い「文部省思想局文書」から見よう。表中、「伊藤千代」名は

伊藤千代子である。この一文を故犬丸義一先生に捧げるものである。

教育関係に於ける女子の左翼運動－文部省思想局文書から
(文部省思想局『思想調査資料』第24輯・昭和9=1934.8から引用)

(一)大正15(1926)年1月 日本女子大、東京女子大の学生有志が会合して婦人革命家ローザ記念*研究会を開催。

(二) 同年9月頃両女子大学生による合同研究会が成立。この研究会は、男子学聯とも連絡があり、その幹部は講師として女子の研究会に出ていた。

(三) 両大学のメンバーの働きかけにより、在京の他2校、関西1校、東北2校に連絡がつき、同年12月に関西及び東北より各1名が上京して会合が開かれた。出席は12、3名。席上、①女子学生社会研究会の全国的組織を結成すること ②本部を東京に置くこと ③全国的組織の確立に努力すべきこと を協議したが、決定には至らなかった。

(四)翌昭和2年3月、西荻窪*で全国から17、8名が参加して第1回大会を開催。女子学聯は、女子学生社会科学運動の統一的指導機関にして学生運動の指導機関ではないことを鮮明にして、運動方針、教育方針、組織方針、役員を決めた。役員は下記の如し。

中央常任委員長(教育部長) 波多野 操(東京女子大)

常任委員(組織部長) 木野 美佐子(東京女子大)

同 (政治部長) 西川 露子(日本女子大)

地方委員 関東 海野 コウ(委員長 東京女子大)

伊藤 千代ママ(東京女子大) ・ 森田 京子(東京女子大)

東北 佐藤 ヤス(委員長 宮城女) ・ 荒 愛子(宮城女)

佐々木八重子(尚綱女)

関西 栗(ママ)田 律子(責任者 同志社女) 藤田[㊦] 栗田=糸田(くめだ)の誤植

なお、女子学連という呼称は必ずしもこの大会で正式決定されたものではないようである。所謂学聯に対して区別するために男子側より呼び習わしたものを女子側でもそのまま承認し慣用せられたものであるというが、よく分からない。また、中央部に於いて教育研究コースを作成して教育にあたった。

(五) 昭和2年6月頃に、同組織が外部に漏れ危険を感じたため、表面的には解散を宣言。メンバーを改めて同年9月再組織を行ない、新たに伊藤千代(東京女子大)、斉藤なお(東京女高師=千代子の尚綱時代の友人)の2名を中央委員に加え、分担を決めて各学校研究会と連絡をとった。

(六) 昭和3年2~3月にかけて中央委員伊藤、波多野、斉藤が他の任務につき女子学連から去ったので、組織の立て直しをおこなった。それをオルグ会議と称した。メンバーは、

《責任校》

委員長 木野 美佐子(東京女大) 東京女大

オルグ 佐藤 ヒロ(日本女大) 日本女大

服部 民子(東京女大) 女高師、東洋文化

村上 冬子(東京女大) 文化学院

小林 清子(津田英) 津田英学塾

(六) このあと3・15事件以降、女子学連の指導者等がぞくぞく検挙され、女子学連は潰滅した。

【*藤田^註【ローザ・ルクセンブルク=1871年ポーランド生まれ、ドイツ共産党の指導者。1919年1月15日反革命軍により虐殺。この日をローザ記念日とする。 *西荻窪=東京女子大所在地】

(『女子学連』の詳細な論考は『治安維持法と現代』治安維持法同盟機関誌・2023年春季号、No.45所収)